

住民の広域連携プロセスに関する事例研究*

Case Study of Wide Area Community Collaboration Process for Scenic Byway Activities *

伊藤優子**・中村幸治***・藤井美智子***・佐藤寛人**

By Yuko ITO**・Koji NAKAMURA***・Michiko FUJII***・Hiroto SATO **

1. はじめに

シーニックバイウェイ北海道では 2 年間の試行期間を経て、2005 年「支笏洞爺ニセコルート」「大雪富良野ルート」「東オホーツクシーニックバイウェイ」、続いて 2006 年「宗谷シーニックバイウェイ」を指定ルートとした。ここに至るまでには、各ルート・エリアで数多くの活動団体が、景観・観光・地域づくりなど得意な分野で確実に活動実績を重ねてきた。

このような個別活動の一方で、年 2 回の活動強化月間には、各ルートや団体がテーマを決めて集中的な取り組みを行い、その成果を全道ミーティング・全道フォーラムなどで発表し、相互確認することで、ルート・エリアを超えた交流が生まれるようになった。また、有限責任中間法人シーニックバイウェイ支援センター（以下支援センター）からの情報提供により、他のルート・エリアの活動が広く活動団体全体に知られるようになった。

その結果、周りが見え、おのずと地域の課題も整理され、活動も量から質への転換が徐々に図られてきた。自己の地域資源だけでなく、ネットワークを活かして周りの資源も取り入れた広域連携の取り組みが生まれたのである。

本稿では、広域連携のプロセスに視点を置いて、シーニックバイウェイ北海道の事例について述べる。

2. 指定ルートの運営体制

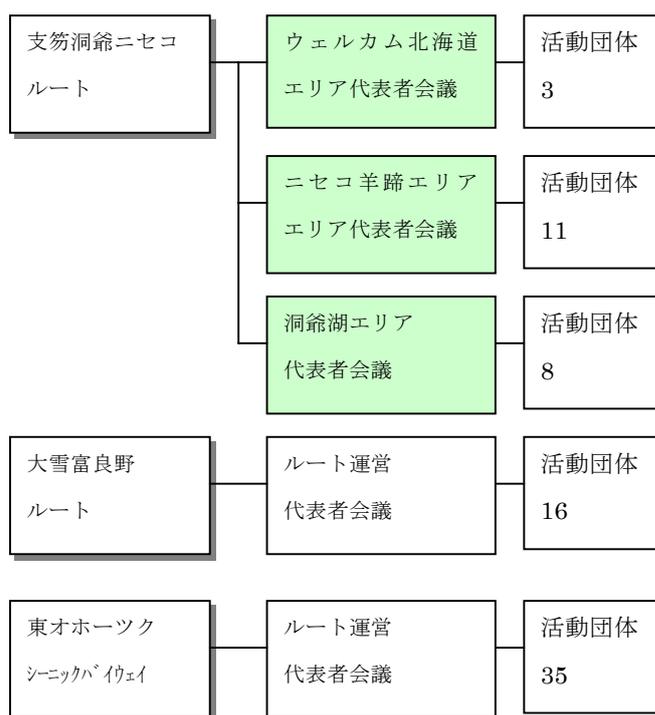
指定ルートの運営体制は、地域の状況により異なる。

「大雪富良野ルート」や「東オホーツクシーニックバイウェイ」のように、1 ルートに 1 つの関係機関が対応する場合は、ルート全体で、地域特性を勘案し、地域の課題として対応することができる。

これに対し、「支笏洞爺ニセコルート」は地理的に広範囲であること、1 ルートに 3 つの関係機関が関わっていること、歴史的にも支笏・ニセコ・洞爺が分散してまとまりにくい地域特性を持つことなどが運営体制を複雑なものにしている。

そのため、1 ルートに 3 つのエリア代表者会議を内在させた運営体制となっている。

図-1 指定ルートの運営体制



*キーワード：シーニックバイウェイ、市民参加

**正会員、社団法人 北海道開発技術センター
(札幌市中央区南 1 条東 2 丁目 1 1、
TEL011-271-3028、FAX011-271-5366)

***非会員、社団法人 北海道開発技術センター
(札幌市中央区南 1 条東 2 丁目 1 1、
TEL011-271-3028、FAX011-271-5366)

ルート名	エリア名	北海道開発局 の出先機関	北海道の 出先機関	自治体数 (2006/04 合併)
支笏洞爺 ニセコ ルート	ウェルカム 北海道	札幌 開発建設部	石狩支庁	2
	ニセコ羊蹄	小樽 開発建設部	後志支庁	9
	洞爺湖	室蘭 開発建設部	胆振支庁	4
大雪 富良野 ルート	—	旭川 開発建設部	上川支庁	9
東オホー ツクシニッ クバイウェイ	—	網走 開発建設部	網走支庁	6

表-1 指定ルートにおける関係機関

3. 広域連携までの経緯

地域特性から鑑みて、指定ルートの中でもっとも広域連携が難しいと想定される「支笏洞爺ニセコルート」の事例を参考にして、問題点の整理と発展方向について検討したい。

(1) 支笏洞爺ニセコルート活動のあゆみ

本ルートでは、地理的な条件、まとまりにくい地域特性、北海道開発局や北海道の出先機関との関わりなどから、他の指定ルートと較べても広域連携は単純には進まないと考えられていた。(表-1 参照)

指定ルート設定時にも、本ルートは3つの支庁に跨る広域連携の可能性を求められたが、約2年間の施行期間でもその期待に応えることは困難だった。そこで、指定ルートへの以降段階でも、ルートとしての共通テーマや共通目標をあえて定めず、エリアの独自性を認めたテーマや目標にしたがって活動に取り組むことになったという経緯もある。

すなわち、「支笏洞爺ニセコルート」は、支笏湖及び千歳市・恵庭市を含む「ウェルカム北海道エリア」、秀峰羊蹄山を中心とした「ニセコ羊蹄エリア」、洞爺湖と有珠山・昭和新山のある「洞爺湖エリア」に別れて、各々が独自のルートストーリーを持って活動することになった。(図-2 参照)

各エリアの観光面の特徴を述べる次のようになる。

「ウェルカム北海道エリア」は北海道の空の玄関口新千歳空港を抱えており、全国でも8番目の

広さを持つ支笏湖を有している。最近、観光客の入れ込みが減少してきており、当エリアにも影響を与えている。

また、「ニセコ羊蹄エリア」の最近の動きは、ニセコ山系を中心にしてオーストリア人のスキー客が年々増えてきており、外国人観光客の対応が、地域振興の新しい取り組みとなることが期待されている。

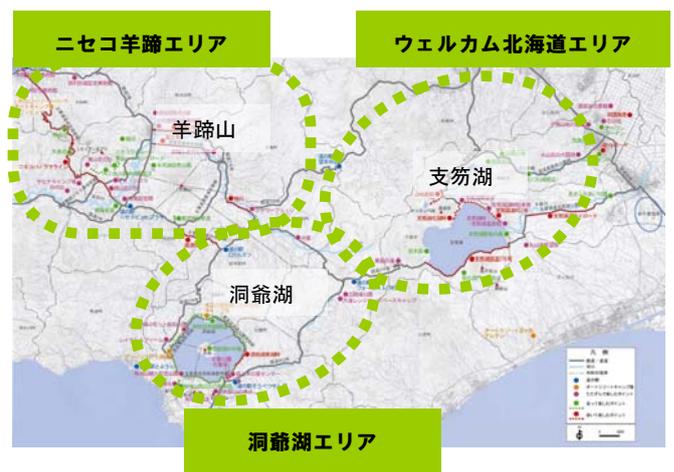
一方、「洞爺湖エリア」は洞爺湖温泉街が有珠山の噴火による被災を受けてから、観光客も住民も減少の兆しが見られる。

地域では、活動団体のヒアリングや年に4,5回エリア代表者会議を開催しているが、「支笏湖」「ニセコ」「洞爺湖」の地域資源を差別化することが、地域づくりであるとして、ルートの連携は望まず、エリア毎に対応したいという要望が強かった。

しかし、エリア代表者や事務局が全道ミーティングやファアラムに参加し、他ルートのシーニックバイウェイに関わる姿勢や法人化の動きを目の当たりにして、徐々に地域連携を望む声があがってきた。

本稿では、地域連携に向けて多くの課題を抱える「支笏洞爺ニセコルート」を対象に、連携事例のプロセスを紹介する。

図-2 支笏洞爺ニセコルートエリア区分



(2) 広域連携の紹介

本ルートは、指定ルートのなかでも先行して地域活動を行ってきた。ワークショップを重ねながら、地域の資源探し・人材探しを行い、エリア毎に活動計画を作成し、行動に移してきた。

その代表的な活動事例が、VSP を活用した清掃活動である。ひとつの活動団体の動きが、地域で評価・認知され、エリアを超えた活動になって行った。情報誌の発行は、地域の活動家がライフワークとして作り続けてきたエリアのガイドブックが、3つのエリアの情報を包括する情報媒体となって、ルート全体で認知・活用されるようになった。

このような地域活動を背景にして、2005 年度、本ルートでは4つの広域連携事業が実施された。

清掃活動や情報誌の発行は、従来から行われていたものが連携事業になったものであり、キャンドルナイトと外国人観光客モニターツアーは本年度初めて取り組んだ事業である。

また、清掃活動やキャンドルナイトが同じ事業が連続して実施されることを指す（橋渡し型）のに対し、他の2つは明確なリーダーが存在して、地域の独自性を活かしながら事業を組み立てていく（結合型）ことを示している。（表-2参照）

キャンペーンは、地域の清掃活動として定着してきている。

ニセコ羊蹄エリアでは、国道沿線の各団体が独自に道路の清掃・沿道の植栽・河畔の清掃などを実施している。

b) 情報誌発行

ニセコ羊蹄エリアの活動団体は10年前からニセコのガイドブックを自主発行している。十周年を記念して発行したガイドブックは、ニセコのイベント情報や写真・マップの紹介に留まらず、「シーニックバイウエイ支笏-洞爺-ニセコルート」も取り上げており、活動団体のホームページ上でもウェブブックとして公開され、広域の情報源となっている。

c) キャンドルナイト-灯りでつなぐ雪の道-

支笏洞爺ニセコルートをキャンドルの灯りで結ぼうと3つのエリアが連携した初の取組みである。キャンドルは約20,000本の協賛があり、支笏では雪あかりの散歩道、洞爺では温泉街を灯りで彩り、ニセコではホテルやスキー場、道の駅、市街地へと広がっていった。自発的な参加もあり、当初予定されていた場所以外の点灯、配布以外のカラーキャンドル、雪のオブジェなど地域の人々が思い思いに雪あかりを楽しんだ。

【目的】

- ①ルート全体の共通の目的を持ってエリアが連携し、支笏洞爺ニセコルートを結ぶイベントを実施する。
- ②ルート全体での連携活動をする際の仕組みを確認する。

【実施日】2006年1月28日（土）、2月4日（土）

【主催】2エリアの3活動団体

【共催】3エリアの8活動団体

【協賛・協力】大手商業施設・企業など6社、
地域の企業・団体など82社

【後援】北海道開発局、支庁、観光連盟、
観光協会、自治体など11団体

【簡易なルール】

- ・ 全エリア参画で実行委員会立ち上げる。
- ・ エリアごと、主要会場ごとに担当者を決める
- ・ 基本計画は実行委員会を中心にニセコエリアで進める。

【無理のない目標設定】

- ・ 想定する地域で点灯できれば良い。

エリア	団体の活動実績	広域連携事業			
		継続		新規	
		橋渡し型	結合型	橋渡し型	結合型
		清掃活動	情報誌発行	キャンドルナイト	外国人観光客モニターツアー
ウェルカム北海道	15	連携	情報提供	実行委員会参画	主催
ニセコ羊蹄	27	-	主催	主催(リーダー)	主催
洞爺湖	7	主催	情報提供	主催	主催

表-2 2005年度エリア毎活動実績

a) 清掃活動

洞爺湖エリアの「よごさん(453)キャンペーン」は、地域の活動団体がはじめた清掃活動であり、国道453号や道道の沿線、駐車帯公園も含む延長150Kmの広範囲で実施されている。町内外の団体、関係機関の連携によって昨年の参加者数は150名。その継続的な活動は、「良好な沿道整備、景観づくり」の一環として地域の高い評価を得ている。

これに連動して、ウェルカム北海道エリアでも国道453号で清掃活動が実施された。参加者数は60名。開催日と事業の周知を目的に、5月30日を実施日と定めた、よごさん(453)ゴミゼロ(530)

- ・ 目標本数に満たなくても良い。
- ・ 無理な動員はしない。支持者を増やすことが大切。
- ・ キャンドルのつくりかた、設置の方法は地域の実情に合わせて柔軟に行う。
- ・ 1回目の実施計画を見て、2回目に修正する。

【具体的な課題】

・ 関係者の関わり方によって、地域の盛り上がり大きな開きができた。地域情報は共有できるように、事前周知が必要だ。

- ・ 今回はキャンドル点火だけで終わってしまったが、音楽など連携するイベントがあればより楽しい企画となる。

d) 外国人観光客モニターツアー

ニセコ地域を訪れる外国人旅行者（主に豪州旅行者）の周遊・レクリエーション活動に対するニーズ把握して、支笏洞爺ニセコルート全体の魅力度向上、集客力の増加を図ること、また、この連携事業がエリア間の連携強化となることを目的に、外国人観光客のモニターツアーを実施した。

ニセコを帰着点として、支笏湖コース・洞爺湖コースを設定した。

支笏湖コースでは、湖と山並みの自然体験に加え、温泉のサービスなど地域資源を活かしたメニューを提供した。洞爺湖コースでは雪遊び体験と日本文化のメニューを提供した。

今回は試行プログラムであったが、各エリアが地域の差別化を図ることが、広域連携のスタートとなることを確認した。

(3) 広域連携に至った要点

本ルートがさまざまな課題を包括しながら、広域連携事業を実施することができた背景には次の4点が要点となっていると考えられる。

- ① 広域連携の必要性・重要性が地域で認知されるようになったこと
- ② エリアの代表者や事務局レベルの信頼関係や相互理解が深まったこと
- ③ 他ルートの事業の取組みを見ながら、本ルートの差別化や先行ルートとしての自負心が再燃したこと
- ④ 地域連携を促すコーディネーターの存在

特に、他ルートとの交流以降、地域の動きに弾みがついたようだ。③は地域リーダーのモチベーションを上げ、活動団体にインセンティブを与える重要な要素であることを確認した。

4. 広域連携の発展方向について

ルート運営の目指すべき姿は、自主自立であるが、その実現にはいくつかの課題がある。例えば、人材の育成と活動費用の捻出である。

人材育成の方策として、現状では社団法人北海道開発技術センターが、地域の人材を雇用して、ルートコーディネーターとしての教育を行い、地域に還元できるような試みを行っている。今後はこのような人材が必要になってくるので、支援センターを中心としたシステム的な人材育成の取り組みも検討しなければならない。

活動費の捻出をするためには、コミュニティビジネスを創出したり、法人化を図り、将来的には指定管理者制度を利用した広域行政に関わる委託の可能性も検討したい。

5. おわりに

地理的、政策的に独立したエリアが取り組んだ広域連携の活動は、地域にも行政にも新しい協働の形を提示できたと考えている。情報を共有し、相互の地域資源を活かして、協働体制を築いたことが、まさに「信頼、規範、ネットワーク」を要するソーシャルキャピタルの一步と考える。

今年度は、行政連絡会議開催に向けた動きも具体化してくるので、地域の広域連携と合わせて、こちらの動きにも期待したい。

参考文献

- 1) 有限責任中間法人シーニックバイウエイ支援センター：「シーニックバイウエイ北海道～みちから始まる地域自立」2006
- 2) シーニックバイウエイ北海道推進協議会：シーニックバイウエイ北海道推進協議会HP
- 3) 内閣府国民生活局市民活動促進課（2002）：「ソーシャルキャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」